聖書(使徒の働き第8章)の記事より

報われた長旅

— エチオピア人の財務大臣の物語 —

ジャスミン・イルディス

聖書に登場するエチオピア人の財務大臣のエピソードを、
小説の形を借りて臨場感あふれる感動のストーリーに仕上げました。

目次

報われた長旅 ---------- 3
エチオピア人の財務大臣の物語（使徒８章） ---------- 79
追記 ---------- 83
あとがき ---------- 98

報われた長旅

ジャスミン・イルディス

大臣の優雅な生活

南国の太陽が降り注ぐエチオピアの谷間に、美しく装飾された柱や丸い窓のある、立派な屋敷がありました。外国の木材に彫刻を施した玄関、美しい壁紙や高級素材で色鮮やかに飾られた部屋、そこが重要人物の住まいであることは誰の目にも明らかでした。

暑さをさえぎるために庭に植えられた花や木々も美しく、主人の人柄を表しているかのようでした。バラの花壇が屋敷への道に色を添え、エキゾチックな木々の緑の隙間からはキラキラと木漏れ陽が差していました。その谷はまるで芸術家の作品のようで、大地を黄土色、丘をベージュとスミレ色で、また、道行く人々の肌をこげ茶色、土壁の丸い小屋は重ね塗りにした絵画のようでした。そして谷間に臨むその屋敷は、それらの溶け合った色の中に、まるでひとつだけ色調の違う別の絵があるかのように建っていました。

人の気配もまばらなその屋敷の庭を、二人の人が散歩しています。父と娘のようです。二人は美しい花々を楽しんでから木陰に座りました。もうひとり男性がいますが、二人の会話に入る様子はありません。彼は二人のためにいつもの珈琲を入れています。「かしこまりました、ご主人様」、「いいえ、ご主人様」、「ただいま参ります、ご主人様」と返事をする声が

聞こえてきます。
屋敷から少し離れたところには、わらを葺いた丸屋根の小屋が建ち並んでいました。その通りには、日焼けした長服姿の男女が往来し、裸足の子どもたちの楽しそうな声が響いていています。ロバや馬は荷物を引いています。
市が立つ日には、街の広場に大勢の人が集まります。たくさんの屋台が軒を連ね、その色彩や香りで街は活気にあふれるのでした。

人生がわからない

この家の主人はかつて財務大臣として女王に仕え、自分自身も大きな財産を築いた人でした。普通の人が望むであろうものは、すでにほとんど手

に入れてきました。多くの召使いが仕える屋敷の暮らしは快適で、この生活がずっと続くようにと願っていましたが、夕暮れ時になると、庭やベランダに座って人生の意味について考え込むようになっていました。

自分の人生がどれだけ幸運かを思い巡らすと、心はいつでも感謝の気持ちでいっぱいになりました。しかし、彼は誰に向かってこの感謝を捧げたら良いのかわかりませんでした。もちろん、彼の両親の導きで女王に仕えることになったのであり、大臣の座に着いたのも、彼が勤勉、正直、誠実に仕事をしていたからです。それでも大臣は、それらを超えた天の助けがあったからこそ今のようになれたのではないかと感じていました。自分の勤勉さと誠実さだけでは、ここまでずっと人生の〝日なた〟を歩き続けられたはずがないと思ったのです。

また彼は、必ず死を迎えることになるという、人間に課せられた悲惨な現実に思いを馳せるようになっていました。「この国の奴隷や貧しい人々はみじめさと悲しみしか知らず、この世の素晴らしいものを味わうことなく人生を終えていく。なんと悲しいことか。死という名の最後の〝故障〟を避けては通れないなら、人生にいったいどれほどの意味があるというのだろう。子どものうちに死ぬこともある。もし造り主がいるならば、人間のような精巧な

ものを創造しておいて、時が来たら、ただ死に引き渡すだけなどという無意味なことをするだろうか。」彼は心の中で問い続けました。

「それではまるで、私が娘のために立派な宮殿を建てて、三日後には屋根が崩落するようにしておき、崩れた後に娘にこう言うようなものだ。『三日間もここに住めたのだから十分だ。再建するつもりなどないよ。』」

「そうしたら娘はこう言うだろう。『三日で崩すなら、なぜこんなに立派なものを建てたの？期待させられたぶん、とてもがっかりしたわ。宮殿じゃなくても、お父さんと一緒の家にいられれば十分だったのに。お父さんの考えていることがわからないわ。』」

一日の終わりに腰をかけてくつろいでいると、決まってこれらのことを考えてしまうのでした。時には、娘と一緒に庭園を散歩している最中にも。

「人の心を楽しませる美しい花々、動物たち、星などは、何のためにあるのだろう。人はせいぜい七十年で消え去ってしまうというのに。」

このほかにも、人生に関する多くの疑問が大臣の心に去来するのでした。「人は善を愛し悪を憎むのに、なぜ自分自身を悪から切り離すことできないのか？ ひとりひとりの魂が善

と愛を慕い求めているのに、悪は影のように人につきまとう。人間はなぜこうも矛盾し、不可解なのか？」しかし、これらの疑問に対する答えは、いくら考えても得られませんでした。

究極の疑問

大臣には子どもの頃から抱いていた最大の疑問は死に関するものでした。「死後に何があるのだろうか？　まるで初めから存在していなかったかのように、人は死ぬと消え去ってしまうのか？　そもそも死後というものがあるのか？」昼も夜も、これらの疑問が消えることはありませんでした。

エジプト人は死後のために莫大なお金をつぎ込んでいるということを、大臣はよく知っていました。彼らは死後にあると言われている来世の準備に熱心でした。遺体をミイラにする高度な技術を持っており、さらに金銀宝石で飾り、墓に納めました。強盗や略奪によって復活までの悠久の休息が邪魔されないようにと、秘密の通路でしか行けない埋葬室を備えた巨大ピラミッドを建設しました。ミイラはそこに横たわり来世を待つ、彼らはそう信じていたのです。犯罪者には来世があるかどうかは不確かだったので、ミイラにしませんでした。

しかし、王家の人々もみな死んでいくのだから、死後に永遠の命を得たとしても、仕えてくれる召使たちはもういないでしょう。もしかしたら逆に奴隷にされるかもしれません。だとしたら何の意味があるというのでしょうか。

かすかな望み

ある日、大臣は街の商人に会いに行きました。その商人が遠い国から「神」についての驚くべきニュースを持ち帰ったと聞いたからです。その商人の店先には高価な生地が積まれ、香料や香辛料の袋が異国の香りを漂わせていました。商人はラクダでキャラバン隊を組み、外国で生地や香辛料を仕入れては数週間かけて戻って来るのでした。

その商人はエジプトの生地を届けに家まで時々行っていたので大臣とは面識がありましたが、召使いではなく、大臣みずから品定めに来たのを見て驚いたようでした。大臣は、遠い国から商人が持ち帰ってきた「新しい神」のニュースを知りたくて来たことを伝えました。するると商人は、驚くべきことを話し始めました。

その「新しい神」とはこの世界の創造主であって、永遠の命をもたらすためにこの世に来

られたというのです。大臣はそれを聞き、これは自分が探し求めていたことへの答えなのかもしれないと感じました。どこで、どの神から、どのようにすれば、永遠の命という贈り物を手に入れることができるのか教えてくれるなら、彼は全商品を買い取ってもよいと思いました。巷にあふれる何の助けにもならない「神々」に飽き飽きしていたからです。

大臣は商人につめ寄りました。「その話はどの国で聞いたのか？」

「ユダヤです」商人は答えました。

「単なるうわさ話ではないのか？」と大臣が聞きました。

「そんなことはありません！ そこではそのお方の奇跡のことでもちきりです！ なんでも、そのお方は死人をよみがえらせたそうです！」

「お前はそれを信じるのか？」大臣は疑わしそうに聞きました。

「死人をよみがえらせるお方なら、死を支配する力をお持ちのはず！ そのお方は私たちのような死ぬべき者とは違うのでしょう。私はそのお方に会っていませんが、信じますよ。」商人は答えました。

大臣は、たいそう喜んで帰途につきました。永遠のいのちについて答えがあるかもしれな

いのです。真相を探るために召使いをユダヤに遣わすこともできますが、大臣はぜひ自分で確かめたいと思いました。召使いを遣わすと、途中で道草を食ったり、異国の美しい女性にうつつを抜かしてしまうことにもなりかねないからです。「召使いが帰る前に自分が死ぬようなことになれば、死と永遠の命についての秘密を見出せない。それではせっかく素晴らしい人生を歩んできたのに、その意味がわからないままで終わってしまう。」

大臣は若い頃から求道者でした。彼はエジプトの神々について精通していました。女王もエジプトの神々には敬意を示していました。しかし、人が人生を愛し始めたとたん、なぜ死が容赦なくすべてを消滅させるのかという疑問に対して、それらの神々は何の答えも与えてくれませんでした。

大臣はファラオの祭司の書物に詳しく、バビロン、ペルシャやメデスの「神々」についても知っていました。これら多くの「神々」は丘の高いところに置かれ、空の星々のような存在でした。しかし、それらの「神々」は、実際に現れたり、何か成し遂げて彼らの存在を証明したこともありませんでした。

ところがあの商人は、ユダヤの「新しい神」について、大臣にこのようにも話したのです。

「この神は天地万物を創造した唯一の方で、エジプトで奴隷にされていたユダヤの民を導き出して解放し、強い国民にされたんだそうです。」しかし商人自身、このユダヤの神と自分がどう関わるべきか決めかねている様子でした。

（傍線の注：この世界を創造した唯一の方とは、日本語の聖書は「神」と訳していますが、天地万物、すなわちこの世界を創造した創造主のこと。ユダヤ人（イスラエル人）を通してご自身をあらわされました。本書では、以降、「神」、「ユダヤの神」、「創造主」、「主」と記します。）

長い旅の計画

商人との会話の後、大臣は女王に相談しました。そしてその翌日には使用人たちに長旅の準備をするよう命じました。ユダヤに向かう旅は、エジプトを抜け、葦の海や砂漠を超えるものであり、数週間、いや数ヶ月もかかると思われました。もし求める答えが見つからなければ、この何千キロに渡る旅も無駄になってしまうわけですが。

大臣は、ユダヤで死者を生き返らせたというお方を自分で見つけようと心に決めていました。女王や大臣の部下、そして最愛の娘は、彼がこの旅に並々ならぬ思い入れを持ってい

ることを察し、彼を送り出すことにしました。

旅立ちが近づくと、大臣の家で旅の支度が始まりました。保存食と水とワインは皮袋に、家畜のエサは飼料袋に入れられました。毛布と枕などの寝具類、お皿、ポットなどの食器類、すべてが用意され、部屋はいっぱいになりました。

出発の日、大臣は召使いのかしらに留守をしっかり管理するよう命じました。しもべと少年たちが荷物をラクダに載せました。隊長がラクダに乗ると、キャラバンはゆっくりと進み始めました。日よけのカバーが掛かった大臣の車[1]もラクダに引かれて続きました。困難な旅が予想されましたが、大臣を引き止めようとする者はだれもいませんでした。

砂漠を通って

馬車に何時間か揺られると、果てしないエチオピアの山々が視界に広がりました。山の東

1　ギリシャ語の新約聖書に記されている大臣が乗った乗り物は通常は立派な戦闘用の二輪の幌なし馬車だと考えられます。しかし、大臣の地位、旅の目的や長さなどを考えると、戦車というよりは天蓋付きの馬車と考えた方がふさわしいでしょう。

側の斜面は豊かな緑で覆われ、西側の谷は乾いた茶色という独特の様相を見せています。さらに進むと丘に囲まれてナイルの肥沃な野原が広がり、畑には農夫たちがいます。彼らは腰布一枚で汗をかきながら働いています。そして、長服を着た女たちが貴重な水の壷を頭に乗せて往来していました。

何日もかけて一行は王家の谷に到着しました。そこは〝王家の墓〟で知られていましたが、後にファラオが埋葬されたギザのピラミッドでいっそう有名になりました。何世紀も保存された記念碑のような埋葬室は、エジプトの人々がファラオは死後も復活を待ち続けると信じていた証でした。金や貴重品だけではなく、あらゆる食糧品も供えていました。彼らは死後の世界について真剣に考えていたからです。

途中の道沿いには、立派な建物や宮殿がありました。死が隣り合わせの世界にいても裕福な人たちがどんなに自分の人生を愛しているかがうかがえました。大臣は網で魚を捕る漁師のように、ラクダに揺られながら様々なことを考えました。馬車の長旅はひたすら続きました。時折、大臣は思いをパピルスの紙に綴りました。また、地平線を見渡しては、目にするあらゆる情景を書き留めました。ユダヤで何が起こるのだろう、それを思うと大臣は期待

で胸がいっぱいになりました。今までかかえてきた多くの疑問への答えが、ようやく見つかるかも知れないのです。

ユダヤへの旅路は砂漠の中をゆっくりと進みました。他の隊商や荷馬車に出会うと親しくあいさつを交わしました。祖国はもう地平線の砂塵の果てです。オアシスに宿営できるときは、なるべく長く休みました。快適なヤシの木陰で休息を取ることもあれば、不毛な砂漠で孤独な時もあります。料理長は皆の食事を整え続け、使いの少年達は家畜にエサや水を与え続けていました。

日中は草の葉を焼き尽くすほどの暑さ、夜は凍えるほどの寒さが砂漠全域を襲います。砂の中をゆっくりと移動する大臣のキャラバンは遠目には

真珠の首飾りのようです。時には、突然突風が吹いて砂を巻き上げ、太陽を遮ります。灼熱状態から一転して強風が吹きつけ、衣服の隙間から体中に砂が入り込みます。そんな時は、キャラバン隊は動きを止め、石像のように身じろぎもせず、砂嵐が過ぎるのを待つのでした。
毎晩、星空の下で横になると、大臣はこの神秘に満ちたユダヤの地に近づいていると思うと嬉しくなりました。一行は、砂漠で単調に昼夜を繰り返す旅に飽き飽きしていましたが、エルサレムの街が近いと思うと胸が膨らみました。
徐々に風景が変わってきます。いばらがぽつぽつと生えているだけの土地が、次第に草原に変わっていきます。地平線に木々が見え始め、その向こうに丘が見えてきました。その翌日、初めて土地の人間が畑にいるのが見えました。ついにユダヤの地に到着したのです。

夢見た街が目の前に

丘の上にあるエルサレムの街の全貌が見えると、捜し求めてきた神にようやく出会えるかもしれないという期待に胸が高鳴りました。エルサレムの街は美しく、市場は活気に満ちています。目抜き通りにはしゃれた店や家屋が立ち並び、多くの外国人で賑わっています。キャ

ラバンは、街のはずれの宿に立ち寄りました。ラクダ使いと少年たちは家畜を小屋に入れ、大臣の荷物を宿舎に運び入れました。

いよいよ街に入ろうとするとき、大臣は家来たちに、「ご主人様」と言われるのを見られないように、「一人で歩いてくるよ」と告げました。身分を明かさないほうが土地の人との本音の会話ができるのではないか、と考えたのです。

エルサレムの街のつくりは驚くべきものです。高い壁が崖の上にそびえ、遠くには有名な神殿を囲むようにして、半世紀前に邪悪な支配者によって建てられたという巨大な壁が見えます。大臣は街の大きな門をくぐりました。

そこは当時の大都会。市場や目貫通りは不思議な魅力を漂わせています。あてもなくさまよう人、急ぎ足で通り過ぎる人、市場のベンチや階段に腰掛けてあたりを眺めている人たちがいます。大臣も足を止めて周りを見渡し、ベンチに座っている人たちの仲間に加わることにしました。そして、そこに腰掛けると、異国の街の情緒にうっとりとしてしまいました。異国情緒溢れた顔立ち、服装、家々、通り、そして木々でさえも調和して色彩をつくりだし、祖国では知らなかった香りが漂っているではありませんか。

多くの人に質問する大臣

ベンチに腰を下ろそうとすると、先に座っていた男が顔を向けて軽くうなずいたので、大臣も祖国の習慣にしたがって会釈を返しました。しばらくの間、彼と他愛のない会話を交わした後、とうとうあの重要なテーマについて質問を切り出しました。幸いなことに、この男はユダヤ人の言う創造主である神について広い知識を持っているらしく、かつて神が、エジプトで奴隷であったユダヤ人をどのように解放し、導き出したかについて詳しく教えてくれました。しかし、男は、この物語がユダヤの民間伝説だという彼の自説を、最後に付け加えました。それを聞いた大臣は驚き、がっかりしてそこに座りこみました。そして「自分は商人が品物といっしょに仕入れてきた噂話をおめでたく信じていただけなのだろうか」、と自問してしまいました。

しかし、大臣はまだ諦められませんでした。何とかユダヤで神を見つけられないかと、出会う人をつかまえては尋ねてみることにしました。よく目立つ噴水のそばの人、店の商人、通りにいる初老のご婦人や若者たち。誰か一人くらいその神がどこで見つかるのか教えてくれるのではないかと期待したのです。確かに、この日、大臣は多くの答えをもらいました。「ユダ

ヤの神？　何で俺に聞くんだ？」と言う者もあれば、もっともらしく「この神こそそうだよ！」という者もあり、ある老婆は、「ああ、お兄さん。神を遠くで探さなくても、あんたの良心の中にいるものだよ。」とも言いました。

エルサレムの誰もが神についてひとかどのことは言うのですが、理解できない大臣はすっかり落胆してしまいました。「神は私の良心の中にいるって？」しかし、それでも通りがかる人たちに尋ねながらエルサレムの街を歩き廻り続けました。ある人はユダヤの神は神殿におられると考え、ある人はオリーブ山に現れると考えていました。ある人は、ユダヤの神とはそれぞれの心の中にいると言い切りました。また、今自分たちがローマの支配下にいるのは、神

がユダヤの民を忘れてしまったからだと言う人もいました。

神殿でつかんだ新たな希望

そうこうするうちに、大臣は見るからに荘厳で美しい神殿に着きました。神殿の周りには大勢の商人や両替商が座り、何かユダヤの神に関係ありそうな巻物や、かごに入った鳩などを売っています。大臣は巻物を売っている屋台の前に来ました。

「この巻物には何が書かれているのかね？」大臣は商人に尋ねました。

「全能の神と世界について、何だって書いてあります！」

「世界のことはわかっているからいいんだ。それより死と永遠の命を司るというユダヤ人の神を探しているんだがね。」

「旦那、ピッタリの所に来なすった！ここにはイザヤ、エゼキエルそれから他の預言書の巻物が揃っております。モーセの律法の書だってありますぜ！旦那、どれにいたしやしょう？」

「こんな巻物の中にユダヤ人のいう神が見つかると言うのか？」大臣は疑わしそうに尋ねました。「聞くところによると、そのお方は死人をよみがえらせたそうじゃないか。私は生きて

おられる神を探しているのであって、偶像について書いてある巻物の物語などではないんだ。」と大臣はきっぱりと言いました。

「それでも神が何と仰っているか、旦那、知りたくないんですかい？ほら、この巻物なんぞどうですかね。生きた神を見つける方法が書いてありますって！」

大臣は商人とこのようなやりとりをして、結局、高額なイザヤ書の巻物を買ってしまいました。大勢の人が神殿の境内を出入りしています。神は神殿の至聖所におられ、至聖所には大祭司以外誰も入れないとされていました。しかも大祭司であっても一年に一回だけしか入れませんでした。

しかし、大臣はそんなことは知りませんでした。大臣は西側の正門に向かい、「異邦人の前庭」で知られている庭に入りました。浅黒い肌と長服のいでたちから、大臣が異邦人、外国人であることは一目瞭然でした。大臣は円柱の回廊に施された見事な文様や美しい碑文に見とれました。神殿に向かってさらに歩を進めようとすると、そこにいた祭司の服を着た男が即座に遮りました。「外国人はここには入れません。」彼は冷たい表情でそう告げました。

「私はエチオピアの大臣だぞ！私がこの神殿に入れないとは、どういうことだ？」と大臣は

言い返しました。
「神の聖い神殿だからこそ、異邦人はだめなのだ。」と祭司も荒々しく言いました。
「神はエルサレムの通りの足なえをいやされたと聞いたぞ！　大臣である私が神にお目にかかれないとはどういうことだ？　あなた方の神は道端の足なえよりこの私のほうが価値がないとでも言うのか？」
「モーセの律法の書にはすでに、神は異邦人、宦官、不法をなす者にはお会いにならないと書かれている。」
「では、神にお目にかかれるのは一体誰だと言うのだ？」
「それは、神の民であるイスラエル人だけである！」
「私は、祖国で孤児を引き取り我が子とした。私はその娘を私の家に連れて来て、服を着させて食べさせ、哀れなその子が苦しまないようにした。あなた方が言う神とは、神を求めている外国人に憐れみを与え賜わないのか？」
「これは律法の規定だ！」と祭司は少しすまなさそうに、しかし頑として言いました。
「神は病をいやし、死人さえも蘇らせるそうではないか。エルサレムの多くの盲人、ろうあ

者や病の人々をいやしたと言われている！　ユダヤ人の神が私を受け入れて下さらないか、せめて神に願ってはくれまいか？」

「ああ！」とやっと合点がいったというように祭司は言いました。「お前は自分を神の子だと主張しているあのペテン師のことを探していたのか？」

「そのお方がペテン師かどうかは知らないが、ユダヤで奇跡をなさる力ある神を私は探しているのだ。」と大臣は答えました。

「その男は神殿にやってきて、聖い巻物を勉強した。一度、彼はそこのテーブルをことごとくひっくり返した。奴が何を言っているのか誰も理解できず、そこに居合わせた者にとってはまったくもって災難だった。自分が神の御子、ユダヤ人の王だと言うのを私も聞いた。もちろん、聞いて笑うしかなかった。狂った人間の話は面白いからな。」

「あなたも彼が病人をいやすのを見たのか？」と大臣が尋ねました。

「見たことはある。病人が彼の衣のふさに触れたとき、その男は、〝あなたの信仰があなたをいやしたのだ。〟と言い、病人は治った。しかし、実際に何が起こったのか、よくわからないのだ。」

大きな落胆

ユダヤで創造主である神を見つけられるのではないか、という希望の光が消えて行くのを、大臣は初めて感じました。こんなに長い大変な旅をしてきたのに、あなたが会いに来たのは単なるペテン師だと祭司に言われ、とてもがっかりしたのです。しかしそれでも、まだあきらめることはできませんでした。むしろ、その人物についてもっと知りたいという思いが沸き起こり始めました。大臣は、祭司にもう一度尋ねました。

「では、その人は何人の病人と盲人をいやしたのだ？」

「聞いたところでは、自分の元に来た病人、盲人、ろうあ者はすべていやしてやったそうだ。悪霊にとりつかれた人々も解放されたと言っていた。それどころか、奴は人々の罪を赦すことができるなどとぬかしていた。」

「そんな奇跡を行なうことができるとは、神の御子であるに違いない。少なくとも、そのお方は我々のような普通の人間とは違うことは確かだ！」と大臣は言いました。

「神の御子だって？　まさか！　奴は安息日を守ることもしなかった。我々が警告したにもかかわらず、奴は安息日に病人をいやしたのだ。まことの神の御子ならば、安息日は必ず守った

だろう。」

「その神の御子はどこに行けば見つけられるか、教えてくれまいか？　あなたはペテン師と呼ぶが、私はそれでもそのお方に会いたいのだ。」

祭司はさげすんで笑いました。「我々は、ローマ皇帝の総督であったポンテオ・ピラトにこのみじめな〝神の御子〟を冒涜罪で引き渡した。こんなにあきれた経験はあったためしがない。ピラトはこの男を他の二人の犯罪者と共に十字架にかけたが、この〝神の御子〟は十字架から自分を降ろして助けることもできなかった。この男の父だという〝神〟でさえ、この時に彼を見捨てたんだ。最も助けを必要とするときにな。かわいそうな大工の息子は、自分の墓を買う十分なお金もなかった。金持ちの一人が彼の遺体を引き取り埋葬したという始末だ。」

「それから？」と大臣は尋ねました。最も重要な質問の答えが、まだ得られていなかったからです。「ユダヤ人の神は、そのことについて何と言っているのだ？　神は病をいやすために御子を送ると言われていたのではなかったのか？」

「確かに多くの預言書を通して、『神はユダヤにメシア[2]を遣わす』と記されているが、あの

2　ヘブル語の maschiach は旧約聖書で油注がれた者（メシア）の意味で使われている。これは、祭司や王たちの

男はメシヤ（救世主）ではない。」

オリーブ山で読む

祭司に神殿の職務がなければ、このような会話は何時間も続いたでしょう。しかし祭司は神殿に戻ってしまいました。分からないことだらけの話を整理しようとして、大臣はしばらくの間、床に釘付けされたかのようにそこに突っ立っていましたが、その後、そのことを思い巡らしながら神殿の階段を降り、通りへと向かいました。

「大臣を拒絶しておきながら、死人をご自分の御子を通してよみがえらせるとはいったいどんな神なのだろう！　死人の神というべきなのか？」このような疑問を思い巡らしながら、大臣はオリーブ山のふもとにある園に続く道を歩いていました。そのゲッセマネと呼ばれる園を歩いている間、太陽は空にまぶしく輝き、鳥は歌うことを止めませんでした。

就任のときに油を注ぐ儀式を行ったことに由来している（出エジプト29・7、Ⅰサムエル10・1）。「油注がれた方」という表現はもともと王にしか使われていなかったのが、「ダビデの家系から出る祭司にして王であられるお方こそメシアである」と預言されてきた。

大臣はオリーブの木の下に腰を下ろし、幹にもたれかかりました。最後の望みをかけてイザヤの書物を手にしました。もしかしたら生ける神にたどり着く道が示されるかもしれない。これまで、エルサレムの神殿や市場や通りにいた人々がこぞって大臣を間違った方向に導いて来たのではないか？　結局、自分はただの一歩もユダヤの神に近づけなかったではないか？　あきらめにも似た思いで大臣は巻物を広げ、書いてあることを読み始めました。大臣は若くしてエジプト、アッシリヤ、ユダヤの各言語を習得していました。この博識ゆえに彼はエチオピアの女王カンダケの宮廷の高い位につくことができたのです。

天よ、聞け。地も耳を傾けよ。
主が語られるからだ。
「子らはわたしが大きくし、育てた。
しかし彼らはわたしに逆らった。
牛はその飼い主を、
ろばは持ち主の飼い葉おけを知っている。

それなのに、イスラエルは知らない。
わたしの民は悟らない。」（イザヤ1・2〜3）

「気の毒な王だ！」大臣はつぶやきました。「国民がお上に向かってこれほど恩知らずでいられるものなのか？」この王は自分の民のことを何と書いているのか、大臣は読み続けました。義の衣を着た人であったと思われるこのお方に大臣の心は惹きつけられました。ユダヤの神を見出せないのならせめてこの王にだけは会うべきだと大臣は思いました。読み続けていくうちに、心を惹きつけてやまないこの王、この主こそがユダヤ人が言う神に違いないと大臣はようやく気付いたのでした。何時間もオリーブの木の下にいたはずなのに、園で過ごした時間はあっという間でした。巻物を読み終えた大臣は起き上がり、もうしばらく滞在することになっている宿舎に戻りました。

大臣はそれからも何度もエルサレムの道々で々に質問を繰り返しましたが、答えは得られませんでした。しかしとうとう、特に目を引くひとりの人と出会いました。それはバザールの屋台で夕食を済ませた後のことでした。その男のいでたちは、神殿の辺りで見かけた人々

と同様に風変わりなものでした。特に印象的だったのは、長服[3]のすその飾り房と額と左腕にくくり付けた小さな革の箱[4]、それに気難しく真面目な面持ちでした。

その男は少し離れたところにいましたが、食事が終わるとふと二人の目が合いました。大臣は思わず会釈しましたが、この小さな会釈が宝箱を開ける鍵になり、大臣が思いもよらなかった会話をもたらしました。この髭面の男は敬虔なユダヤ教徒で、その一貫した生活様式について教えてくれたのです。彼は嘘をつかず、神殿に収入の十分の一を捧げ、安息日の戒めを厳しく守っているとのことでした。神の律法と戒めについて精通した彼の知識は、大臣にとって黄金のようでした。今、初めて大臣は、神の戒めを守ることによって、永遠の命を獲得できるのだと知ったのです。今度こそゴールが見えたと大臣は思いました。しかし、苦い落胆が襲ってくるのに時間はかかりませんでした。イスラエルの神はイスラエルの民だけの神であり、外国人は神殿で神を礼拝する資格がないのだと、その男は言い放ったのです。

これはすでに神殿で祭司から告げられたことと同じだったので、大臣はため息をつくほか

3　マルコ12・38

4　経札として知られ、聖句が書き記されたものが入れられていました。マタイ23・5をご参照下さい。

ありませんでした。「しかし、本当に他の国民には望みがないのかね？」と大臣は尋ねました。「望みが無くはありません。もし、真剣に神を求めユダヤ教徒になるためのすべての掟を守るならば、神殿の後ろの戸口からちょっとだけ入ることが許されるでしょう。」と、その男は偉そうに答えました。

「そうか。では、ユダヤの信仰を受け取ったら、次に何をしなければならないのかね？」大臣は質問を重ねました。「モーセの律法の戒めを一生懸命に守ることです。そうでなければ神を喜ばせることは絶対にできません。」と男は答えました。「私は・・・」と男は自慢げに続けました。「律法を守ることについてはどの会派よりも厳格なパリサイ派に属しており、例えば、あなたと同じ食卓につくべきかどうかも決めかねているほどです。私たち聖なる民は異邦人の汚れから我が身を守るべきだからです。神に確実に受け入れられて生きるために、律法の数も増やしました。今やその数は六百十三に上りますが、私たちは細心の注意を払いながら、日々掟に従い続けているのです。」遠くからでも財務大臣の高貴な身分は見て取れるほどでしたが、それを聞いた大臣は今の自分がたいそうちっぽけでみじめな存在に感じられました。そこに黙って座り、うなだれるしかありませんでした。

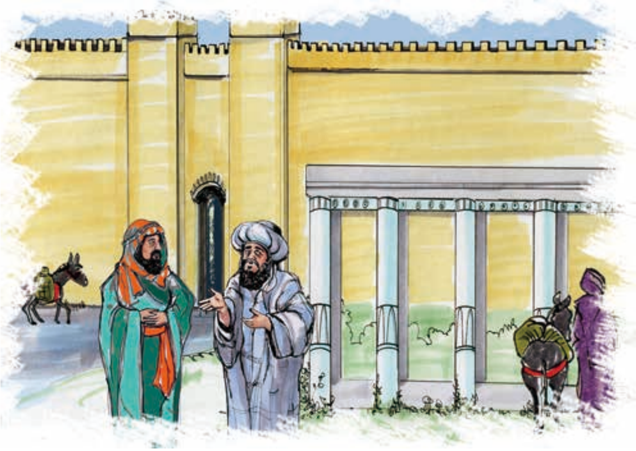
また男が口を開きました。「まあ、私ほどの敬虔さには誰もがなれるわけではありませんよ。神もそうお考えで、あがないの日という意味のヨーム・キップールを定めて下さったんです。これは毎年秋に行なわれますが、神が住まわれる神殿の至聖所の中で大祭司がいけにえの動物の血を捧げ、国中の罪の赦しのために神に嘆願するのです。そうすると前の年のすべての罪が赦されるというわけです。」

それを聞いて財務大臣は尋ねました。「その偉大な日が来る直前に亡くなった人たちはどうなるのだ?」パリサイ人は冷淡に答えました。「私のように細心の注意を払い懸命に戒めを守っていたかどうかによります。守っていなかったのであれば、永遠に燃え続ける地獄に行くことになります。」

この言葉の一撃に、大臣は打ちのめされてしまいました。ほとんどのユダヤ人でさえ神を喜ばせることができないのであれば、どうやって異邦人である自分が神に受け入れられると言うのでしょう。パリサイ人は大臣が受けた衝撃の大きさを見て、慰めのことばを探しました。「しかし、いつかすべてが良くなるのです。メシヤ(救世主)が来ると、麗しい神の御国の中で私たちは敬虔な者とされ、この神とともに異邦人を治めるようになるのです。」しかし

実際、正真正銘の異邦人である大臣の耳にこの言葉がどう響くのか、パリサイ人には思いやることはできませんでした。大臣が求めている永遠の命の望みにとって、メシヤがまだ到来していないのは致命的でした。大臣の中に様々な疑問が浮かび上がりました。「私が死ぬまでに、もし、メシヤが到来しない場合はどうなるのだろう？」大臣はどうにか立ち上がると、もう一度パリサイ人に儀礼的に会釈をし、重い心のままおぼつかない足どりで宿舎に帰りました。数週間が過ぎましたが、相変わらず大臣は、ユダヤの神の元へ導いてくれる知識を持った人に会えるのではという淡い期待とともに、エルサレムの街角を歩いているのでした。また夕方になり、大臣は巻物を開きましたが、多くの箇所が理解不能でした。例えば、次のような箇所です。

ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。
ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、
その名は「不思議な預言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。
その主権は増し加わり、その平和は限りなく（イザヤ9・6〜7ａ）



結局、出会った人は誰も大臣の助けにはなりませんでした。そしてとうとう次の日、大臣は不本意ながら祖国に帰る決断をし、帰りの旅支度を家来たちに命じました。しかし、大臣は神について最後にもう一度だけ尋ねようと通りに出ていきました。ひとつ思いついたことがあったのです。「今日はあえて病人、ろうあ者、盲人を尋ね歩こう、そうすれば全能の神について何か手がかりくらいは得られるかもしれない。」大臣は神殿の入り口や道端で障害者や盲人がたくさん物乞いをしていたのを思い出し、そう考えたのです。

神殿に着くと、階段の隅にいる盲人のところへ行きました。ほとんど目が見えず、ぼろぼろの身なりでした。近付いて来る足音に、盲人はいくらか硬貨

の入ったコップを差し出しました。「誰か神の御名によって、わしにお恵みをくださらんかね？」大臣はその前で足を止めると、財布から何枚か硬貨を出しコップの中に投げ入れました。硬貨の入る音を聞いて盲人は礼を言いました。大臣は盲人に向かって、かがんで尋ねました。「ユダヤの神は、あなたの目が再び見えるようになるようにと目を留めてくださらなかったのかね？」

「たくさんの盲人や病人がそのお方の周りを取り囲んでいたから、わしはそのお方に近付くことさえできなかったんでさあ！」と盲人は答えました。

「それで、そのお方はどこに行かれた？」大臣は尋ねました。

「エルサレムの街にそのお方が入って行かれると、大群衆もそのお方について行ったんです。わしも自分の杖を取って、そのお方の元へ行こうとやってみたんですが、大勢でわしを押し戻すもんだから、わしはいやされなかった。神殿の前で物乞いをやっている足なえがいたんですが、そいつはどうにかしてそばまで行ったもんだから、そいつはいやされたというわけでさあ。」

身を乗り出すように大臣は尋ねました。「そのいやされた者はどこにいるのかね？」

いやされてしまえば、もうわしとは関わり合いたくないってことさ。だから、奴がどこにいるかなんて聞かれてもねえ。」

「彼がどこに住んでいたかのかもわからないのかね？」と大臣は尋ねました。

「旦那さんよ、わしはただの乞食だよ。わしと関わっても何の自慢にもならないんでさあ！　わしがもし偉い身分だったら、こぞってわしの仲間を探すんでしょうがね。」

物乞いは、次のお恵み主が来る足音を聞きつけて質問に背を向けました。大臣はついに一筋の小道を見つけた思いでしたが、もう、そこから先はどうすることもできませんでした。今はもう女王の元に戻らなければならなかったからです。

出発は失望とともに

大臣のキャラバンは山積みの荷物と長服とターバン姿のラクダ乗りたちと一緒に南へ、ガザに向かって出発しました。そこでも大臣は、その土地の人々が信じる神について聞くために一休みしました。

エルサレム市街からさほど遠くないところに、神の忠実なしもべピリポが住んでいました。

彼の家族は妻と四人の思慮深い娘たちで、住まいはにぎやかな通り沿いにある小さな一軒家、信心深く謙虚な一家でした。ピリポは、多くの奇跡を通してユダヤの平和の君を知り、そのお方に生涯従う決心をしていました。

大臣がエルサレムを発ったのと同時に、神の御使いがピリポに現れ、エルサレムからガザへ通じる砂漠の道を行くように告げました。[5]

突然現れた見知らぬ人

ピリポは、神の御使いが命じた通りに南へ赴きました。その寂しいガザの道で、エチオピアの女王の宮廷に仕える、威厳ある男性、かの財務大臣が見えました。大臣は高価な材料で作られたひさし付きの馬車に乗り、見ると、手にした巻物を読むことに没頭しているようでした。この不毛の荒野で、大臣は声に出してユダヤの神について読み上げることで、口から出るその言葉が耳に入ることを喜んでいるようでした。大臣はピリポがそばまでやって来るまで彼に気づきませんでした。

5　使徒8・26

主の霊がピリポに語りました。「この馬車について行きなさい！」
ピリポは大臣に挨拶しました。「ご主人に平安あれ。」
「あなたにも！」と大臣は返しました。
「お急ぎですか？」ピリポは尋ねました。
「ガザに向かっているのです。永遠の命を与えて下さるというユダヤの神を探しているのです！」、「私の馬車に乗りませんか！」大臣はピリポを招きました。
召使いが馬車を止め、走り寄ってピリポを馬車に乗せました。大臣横に座ったピリポは、この人の両手に広げられている巻物がイザヤ書であることに気がつき、首を伸ばして覗き込みました。「あなたはご自分で読んでいて意味がわかりますか？」ピリポは尋ねました。
「導く人がなければ、どうしてわかりましょう。これまでに色んなものを読んできましたが、ここでは何の役にも立たないのです。読めば読むほど、とても重要な内容が記されているとはわかるのです。しかし、どうしても理解することができません。誰かが私に説明してくれたら、どれだけありがたいか・・・」と大臣は嘆きました。
「ご主人はどこのご出身で？どちらを旅されたのですか？」ピリポは尋ねました。

「エチオピアから来ました。実は私は女王の宮廷の大臣の地位にありますが、ある日、国で商人の一人から死人をも蘇らせるというユダヤの神のことを聞いたのです。そのお方にお会いしたくてはるばるやって来たというわけです。」

「それで、ご主人はそのお方にお会いできましたか?」ピリポは尋ねました。

「エルサレムの店々や通りという通りを歩いてみましたよ。何週間もかけてその神を探しましたが、誰に聞いてもわかりませんでした。それから神殿にも行ってみましたが、私が異邦人ということでそこに入ることすら許されませんでした。」大臣は悔しそうに付け加えました。

ついに目的にたどり着いた

「ああ、そういうことでしたら、私に任せてください。信じられないかもしれませんが、実はご主人が読んだそのお方を私は個人的によく知っているのです。何度もお会いしています。あんなに力強く、また愛を持って語る方には後にも先にも会ったことはありません。ことばだけでなく、なさったこと一つ一つにも本当に心が震えました。」

「おお!では、あなたはそのお方の友達なのですね?」と大臣は尋ねました。

「私はピリポという、そのお方の忠実なしもべに過ぎません！」彼は答えました。

「しかしエルサレムの商人は、この巻物が七百年以上も前に書かれたと言っていました。私はこれを読みながら、この著者は自分自身について書いているのか、それともほかの誰かについて書いているのか何度も考えました。しかし今、あなたがこの著者に会って知っていると言う。どうにもつじつまが合いません。どういうことですか？　よもや私をだまそうというのではないでしょうな。この巻物は何世紀も前に書かれているというのに、あなたはこのお方に実際に会ったと言っているのですから。」

大臣がその時に読んでいた文とは、

彼は痛めつけられた。
彼は苦しんだが、口を開かない。
ほふり場に引かれて行く羊のように、
毛を刈る者の前で黙っている雄羊のように、
彼は口を開かない。

しいたげと、さばきによって、彼は取り去られた。
彼の時代の者で、だれが思ったことだろう。
彼がわたしの民のそむきの罪のために打たれ、
生ける者の地から絶たれたことを。（聖書：イザヤ53・7～8）

大臣はピリポを見て尋ねました。
「この預言者は誰について書いているのです？　自分自身か、それとも他のだれかについてなのですか？」[6]
「ご主人のお気持ちはよくわかります。一言では難しいのですが、でも、私の言っていることは本当のことです。イザヤ書のこの箇所の意味については、何世紀にも渡って多くの人々が研究してきました。驚かれるかもしれませんが、私はこのお方が何者なのか明確に話すことができます。ここで預言者イザヤは、約束されたメシヤ（救世主）について書いているのです。そのお方は救い主で、何世紀も前から神が『送る』とおっしゃったお方なのです。

6　使徒8・34

それがなんと、私たちが生きているこの時代に実現したのです！　このお方はエルサレムからさほど遠くないベツレヘムの町で生まれました。イザヤの頃と同じ七百五十年ほど前に、神は預言者ミカを通してもこのことを私たちに告げられました。このメシヤが三十歳になった時、十二人の男たちを集め、全地に神の良き知らせを語り告げ始めたのです。」
「そのお方といつもともにいた教え子たちは、弟子とか使徒とか呼ばれていました。そのお方は学がないはずなのに、彼のように上手に教える人は今までに見たことがありません。そして、教えるだけでなく、多くの重い病人をいやされたんです。そのいくつかを私も目撃しましたし、その他は十二人の弟子の一人で私と同名の者が詳細を全部教えてくれました。おかげで、まるで私がいつもそこにいたかのようです。」
「また私と同名の弟子がこんな話をしてくれました。『ある日、ガリラヤ湖で舟に乗っていたとき、ひどい嵐が襲って来た。船が沈みそうになって、このままでは死んでしまうと怖くなったが、そんな中でもそのお方は何事もないかのようにぐっすり眠っていた。必死になってそのお方を起こしたら、臆病者だと叱られて、それから嵐に向かって静まるように命じられた。それまで荒れ狂っていた大波が瞬く間に治まった。ありえないような体験だった。』」

「では、故郷で聞いたあの商人の話はやっぱり正しかったということですか！」と大臣は言いました。「もっと教えてください、知りたいんです。」
「またあるときは、ベタニヤにいる友が重病を患っていると聞いて、そのお方は十二人を連れて彼の元に向かっていたんです。そのお方にはあらゆる病を癒す力があると弟子達はいつも証ししていましたから。」
「すぐに行ってあげたわけですね？」
「それが違うのです。十二人の弟子も『おや』と首をかしげたのですが、そのお方は『もう二日間ここにとどまる』とおっしゃいました。それで、皆がようやく村に辿り着いたとき、病人のラザロはすでに亡くなっていて、多くの友人、隣人、親戚が葬儀に集まっていました。あちこちから泣き声が聞こえ、本当に心が痛みましたが、もう遅すぎました。ラザロの姉のマルタが悔しそうに言いました。『もっと早く来てくださっていれば、弟は死なずに済んだのに。』しかし、次に起こったことを見たとき、弟子たちは目を疑いました。そのお方は二つのことをお命じになったんです。一つ目は『墓から岩を取りのけなさい！』でした。マルタは反対しました。『お言葉ですが、弟が死んでから四日経っています。この暑さでは、

遺体はもう臭くなっておりましょう。』それでもそのお方は、岩を取りのけさせました。そして、墓に向かって大声で叫ばれました！『ラザロよ、出て来なさい！』。これが二つ目の命令でした。すると、四日間死んでいた人が皆の前に出て来たのです。ベタニヤでは遺体は白い布に包むのですが、それをまとったままでラザロは出て来たのです。あり得ないその光景に皆が息を呑みました。その時、このことを目撃した人たちは、このお方こそイスラエルのメシヤ、神の御子であると確信し、そのお方を信じたのです。」

大臣はこらえ切れなくなりました。「教えてください。では、なぜあなたは今そのお方と一緒でないのです？ 私なら、そのお方が行くところならどこへでもついて行くのに。」

ピリポは笑いながら、「そう来ると思いましたよ！ とにかく、このお方は誰よりも人々を愛され、誰よりも良くしてくださり、何一つ間違ったことはなさらなかったんです。そう、罪に定められるようなことは何一つなかったのです。でも、それにも関わらず、人々はこのお方を死刑に定め、釘を打ち付け、十字架にかけてしまいました。」

大臣はピリポの話に割り込んで言いました。「十字架に？ その話なら前にも聞いたことがあります。まさか、あなたは二人の極悪人と一緒に十字架にかけられた、あのペテン師の

ことを言いたいんじゃないでしょうね。」

「そのお方がペテン師だと誰がご主人に言ったのですか？」ピリポは、大変な長旅をしてまで探し求めてきたメシアを、この人がペテン師と呼んだことを不思議に思いました。

「私は、ユダヤの神について調べるためにエルサレムの神殿に行きましたが、宮に入るのを祭司に断られました。押し問答の中で、私が探し求めていた、死人をよみがえらせ、病人をいやすというその人は実はペテン師であったと知らされました。ポンテオ・ピラトがその人を十字架にかけたとき、自分を救うことさえできなかったと祭司は言っていましたよ。力ある神だというならば、なぜ自分を救えなかったんでしょう？」

「なるほど確かに、このお方はそうなさろうと思えばそれがおできになりました。しかし、何もおっしゃらずに十字架にかかられたんです。その死の意味を理解して受け止められるように十二人の弟子を時間をかけて訓練なさいました。にも関わらず、弟子たちはそれを信じることができませんでした。何度も何度も弟子たちにこのお方は説明なさったんです、これがわたしたちの罪を取り除く唯一の手段だとことを。『神の御心は、人々の犯した罪の代わりに私が死ぬことです。私が罪を負って死ななければ、誰も永遠の裁きを免れることは

できないのです。』このお方が死なれたのは、そんなに前の話ではありません。このことはあなた様が訪れた街の門の外で起きて、そこにはローマの百人隊長もいました。この隊長は、たくさんの悲惨な戦いを生き抜き、たくさんの十字架刑を見て来たそうです。恐怖で絶望的な状況になったとき人はどんなに取り乱すか、百人隊長はよく知っていました。ののしりの言葉、叫び声、うめき声、すすり泣く声。何時間にも渡る壮絶な、生に執着しながら死に呑み込まれる現場を隊長は間近に見てきたのです。しかし、今までとはまったく違う経験をしたこの隊長は証言しました。他の誰とも違った死に方をした人がいたと。その人は自分を痛めつける周りの者に対して、たったの一言も責めたりしなかったそうです。群衆がその人をののしっている間も、天の父に向かって祈ったというのです。『父よ、彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。』」

「ちょっと待ってください。」大臣は言いました。「預言者はこう記していますよね。『彼は口を開かない。ほふり場に引かれて行く羊のように』この十字架刑の時の状況とよく似ているではありませんか。」

「まったくそのとおり！今私が言ったことは、預言者が書き記していたことがまさに起こった

ということです。このお方の最期のお言葉が『完了した』でした。つまりそれは、神が計画された人類の救いが完了したということです。十字架上でそのようなことを言った人は、それまでに一人もいませんでした。それほど、特別なことが起こったのです。一部始終を見ていた百人隊長は合点がいきました。そして公然と言い放ったんです。『このお方は、本当に神の御子であった！』」

「ちょっと言わせてもらってよろしいですか。」話の途中で大臣が言いました。「聞かせていただいたこの話、私は信じますよ！　そのお方は明らかに普通の人とは違う。この巻物が、十字架にかかられたお方について記されているのだということが、だんだんはっきりしてきました。どうか、もっと話を聞かせてください。こんなすごい話は初めてだ。」

「すごいのはここからです。このお方は死んで終わりではなったんです。このお方は何一つ間違ったことはなさらず、罪を犯されなかったので、死はこのお方を捕らえることができませんでした。つまり、このお方は三日目によみがえられたのです。」

大臣は目を見開き、驚きのあまり息を呑みました。「えっ、何ですって？　要するに、そのお方は生き返ったということですか？　そんな話は聞いていなかった！　証拠はあるんですか？」

「もちろんですとも！ 前もって弟子たちは聞かされていましたからね。ただし、疑う理由はなかったのに、弟子たちはこのお方の話をいい加減に聞いていました。しかし、このお方がおっしゃったことはすべて正しかったのです。この方は言われました、『私は真理です。』と。[7] その後、弟子たちは、復活されたそのお方が彼らの目の前に現れ、話しをし、また、触れて、ようやく弟子たちは確信したのです。そのお方が前もって弟子たちに言われていたことはすべて本当だったと。そのお方はベタニヤで言われました。『わたしはよみがえりであり、いのちです。』[8] でもその時は、誰もこの言葉の重大さが分かっていませんでした。」
「それで、そのお方は今どこにおられるのですか？ もし、そのお方が生きておられるなら、いつか必ずお会いしたいのです。」
「ご主人、一番重要な質問をよくぞなされました。実は、このお方が復活された後、ご自分のことについて世に伝えて行くように弟子達にお命じになりました。そのおおとばはこうです。『わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。それゆえ、

7 ヨハネ14・6
8 ヨハネ11・25

あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名に
よってバプテスマを授け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべての事を守るよ
うに、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつもあなたがたとともに
います。』[9]」
「この言葉を最後にそのお方は弟子たちに別れを告げ、天に昇って行かれました。すべて弟
子たちの目の前で起きたことです。そのお方が天の父の元に昇られていくのをあっけにとら
れて見上げていると、突然、白い服を着た二人の人が現れたのです。二人は神の御使いでし
た。御使いは弟子たちを励まして言いました。『ガリラヤの人たち。なぜ天を見上げて立っ
ているのですか。』御使いは、主(このお方)は天に昇られたのと同じ姿で戻って来られると
教えてくれました。[10]あのお方も同じことを何度も前もって私たちに教えてくださいました。
終わりの時代になったとき、このお方は再びこの世界に戻って来られる—そのときは初めに
来られたような飼葉おけに入れられた赤ん坊としてではなくて、力と栄光に満ちたお姿で来

9　マタイ28・18〜20
10　使徒1・11

られるのです。そのとき、すべての人はさばかれることになります。さばきの日から逃れられる人はだれもいません。さばきの日に問われるのはただ一つのことだけです。生きている間、このお方の側に固く立っていたかということです。」

大臣は言いました、「どれもこれも、私には初めての話ばかりです。このことについて、じっくり考えてみなければ。私の理解が正しければ、このお方についていくかどうかは一人一人の決断によるということになります。ピリポ、どうか教えてください。私がこのお方についていくことは可能なのでしょうか？　エチオピア人の私であっても？」

「その結論は大正解ですよ」とピリポは答えました。「すべての人、すべての部族、すべての国民がこのお方のところに来ることができ、また、このお方が救ってくださるんです。つまり、遠いエチオピアから来たあなた様も例外ではありません。」

「となれば、私がわからないことは後一つです。このお方について私たちは実にたくさん語り合って来ましたが、私の巻物と同様、あなたはずっと『このお方』と呼んでいます。そのお方はお名前をお持ちではなかったのでしょうか？」

「ええ、ありましたとも、特別なお名前が。このお方はイエスというお名前でした。」

「そんな名前があるんですね。エチオピアにも立派で良い名前がいろいろありますが、イエスという名前は、私は初めて聞きました。」

「この名前には、特別な意味がありましてね。このお方について預言してきたこれまでの預言者たちにも、このお名前は明かされていませんでした。長い間、神は内緒になさっていたんですよ。このお方が生まれるほんの少し前に、御使いがこう告げました。『マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。』[11] 神ご自身が、このお名前をいと高き御名とされたのです。このお名前は変わっているとか素敵だとかいう類いのものではなく、お名前自体がご計画なのです。このお方は自分がどんな存在であるか、繰り返し私たちに教えてくださいました。良き羊飼い、世の光、父の元へ導く道、天への門、真理、いのち・・・。イエスの名はこれらすべてを表しています。この地上を生きた人の中で、自分についてこのように言えた人は一人もいませんでした。唯一、このお方にとってふさわしいお名前だったんです。これらの御言葉は、このお方がどんな存在であるか表しています。このお方こそ、神が約束された真の救い主であり、油注がれたメシヤ、キリストなのです。『それゆえ神は、

11 マタイ1・21

この方を高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。』[12]つまり、この名を口にする者はすべて救われる、その人は裁きを受ける必要がなくなるだけでなく、永遠の命を与えられる、つまり天国に入れるってことなんですよ。」
「ピリポ、私の旅の目的の話に戻りますが、私は、故郷にいるときからずっと創造主である神がいるに違いないと思って来ました。この神を見つけようと、何週間もエルサレムに滞在し苦労を重ねたことはお話しした通りです。そのときは、このお方を礼拝したいと願っても、叶いませんでした。今、神への道をあなたはご存知ですか?」
「まだお気づきではありませんか? イエスこそが創造主である神への唯一の道なのです! そうです、イエスだけなのです。神を見つける手段は、どこを探しても他にありません。私たちが自分で神の元へ行こうとどんな努力しても、たどり着くことはできません。神ご自身も、イエスを介して私たちにお会いになられたんです。神は、このイエス様だけを私たちの信仰の対象として示されたのです。[13]『この方以外には、だれによっても救いはありません。

12　ピリピ2・9
13　ローマ3・25

世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべきどんな名も与えられていないからです。[14]』」

「私は、あなたの話をちゃんと理解できていますかね？　我々は神の元へ直接行くことはできないということですね？　ただイエスを通してのみ可能ということなんですね？」と大臣は言いました。

「その通りです、ご主人！　イエス様なしで神のもとに来ようとする人は、神の御心に背いているということになります。なぜなら、神はご自分の御子イエスを通して私たちが永遠の命を得るように、はっきりとイエス様に任命されたからです。十字架の上で救いを成し遂げられた結果、イエスご自身が与え主となられました。」

「ここに来て、なぜ敬虔な祭司が神への道を私に教えられなかったのかが、わかってきました。祭司は、そのお方についてたくさん語っておきながら、自分自身ではイエスを認めることをしなかったので神のことがわからなかったというわけですね。」

「ご主人、あなたの救いまであと一息です。祈りで主イエスに呼びかけ、ご自身の罪を口で

14　使徒4・12

告白し、あなたの人生にこのお方をお招きしてください。」
ピリポが言った罪という言葉に、大臣はムッとしました。「罪とはどういうことです？曲がりなりにも私は良い人間としてこれまでやってきました。女王にも家来にも、それから友人たちにもいつも誠実でした。彼らを裏切ったことはありません。また、自分にできることは何でもしてきました。物乞いが来たときはいつでも、必ず施しを与えていました。それなのに、あなたは私が罪人だと言うのですか？」
「ご主人、あなたは今まで嘘をついたり、盗んだり、人を憎んだりしたことはないですか？」
とピリポは尋ねました。
「ああ、子どもの頃に小さな嘘はつきましたよ、親に怒られるのが嫌だったのでね。そういえば隣の家の庭になっている果物を盗ったこともありましたな。もちろん、これらの出来事はうんと昔のことですが！」
「ほらね、だから私たちは神の目には罪人なんですよ！」とピリポは付け足しました。
「だったら、神は、私たちを初めから嘘をつくように造られたのではないですか？おかげで、私は両親から叱られずに済みましたよ！」と大臣は尋ねました。

ピリポは大臣に、どのようにして最初の罪がこの世界に入り込み、なぜ、嘘や悪い思いやねたみが私たちを支配しているのかを話し始めました。それは、神によって最初に創造された人、アダムが神に反逆して離れたことによって呪われ、この世界に死が入った。すなわち、人間がいのちの源から離れたのでいのちを損なったということです。アダムの子孫である私たちは皆アダムと同じことをしています。自分の生みの親である神を無視し、あたかも自分が神であるかのように自分中心に生きているのです。

自分のことを正しくて良い人間だと自認していた大臣は、これを聞いてがっかりしました。自己イメージが、まるで砂で作った城が打ち寄せる波で崩れるように壊れていきました。

そこでピリポは、メシアについての福音、この窮地から抜け出す良き知らせについて話し始めました。大臣が商人から聞かされていたのは、福音のほんの一部でしかありませんでした。「福音で言われていることは単純なんです。人類はみな自分の生みの親である方から迷いでてしまった迷子で、神の律法に背いたので、裁きの座に出るしかなかったんです。でも、イエス様が、なんと、私たちの受けるべき罰を私たちの身代わりに十字架上で受けられたことによって、私たちは赦され永遠の命をいただけることになりました。つまりそれは、贈り物

として天国を受け取るということです。神がくださるこの愛を受け入れた人、個人的に神の御子を受け入れた人は誰でも、新しくされるんです。『けれども、私たちの国籍は天国にあります。』と書いてある通りです。[15]」

「ここまで聞いたら」と大臣は言いました。「私もイエス様を自分の人生にお迎えしたいです。」

そうして大臣は祈りました。

「来て下さい、イエス様！　どうか私をピリポのように、あなたのしもべとして迎え入れて下さい。生ける限りあなたに忠実でいられるように、力を与えて下さい。あなたが行くところどこへでも、私はついていきます！　私のすることすべてがあなたの御心にかないますように！　どうか主よ、私のすべての罪をお赦しください！」

「これであなたも神の子どもです。」とピリポは言いました。「イエスがあなたの救い主となり、また天におられる神があなたの父親となってくださいました。誰でも神の子どもであれば、天国の相続人なのです。今や、エチオピアの女王カンダケの宝物など比べものにならないほどの富をあなたは持っているんですよ。」

15　ピリピ3・20

「こんなに単純なことで良いのでしょうか？」と大臣は尋ねました。

「そう、単純なんです。だって、人でなくて神がお考えになったことですから！」ピリポは言いました。

「死んだ後も永遠の命を保つためには、私はどうすれば良いのでしょう？」大臣は尋ねました。

「ただ主イエスを信じ、この方に祈り従い続ければ良いのです！」とピリポは言いました。

「ほかにも聞きたいことがあります、ピリポ。私の家来たち、私の娘、そして私の女王陛下もこの永遠の命を受け取ることはできるのでしょうか？」

ピリポは微笑んで言いました。「創造主である神はすべての人を招いておられるんです。例外なく、受け取るようにと。」

「本当にそれだけですか？」大臣は続けました。永遠の命を受け取ることがこんなにも簡単であることが、未だに信じられないといった風でした。「自分に起こったのがどれほどのことであるかまだよく実感できないんです。馬車から降りて、飛び跳ねてこの喜びを表してみましょうか。私の今の気持ちをわかっていただけますか？これは偶然なのでしょうか？イザヤの巻物にどんな素晴らしいことが書かれているのかも知らずに、私はそれを手に入れま

した。また、ちょうど救い主であられる神の御子について書かれている箇所を読んでいて、意味が理解できずにいると、なぜかあなたが現れて私を助けてくれました。それだけじゃない。この救いの話はつい最近完了したばかりだというのですから。神なくしては、こんなことはあり得ません。偶然では説明がつきません。」

「あなたは、本当に心尽くして創造主である神を探し求めたのですね。」とピリポは続けました。「労を惜しまず犠牲もいとわず、よくぞやり遂げられました！　心尽くして神を求める者は誰でもそのお方を見つけると約束されていて、古くから聖書に記されているんです。『もし、あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見つけるだろう。わたしはあなたがたに見つけられる。』[16] あなたはそれを身をもって体験したということですね。それから、今になって言いますが、私があなたを見つけるようにと、神の御使いから言われたのです。つまり、神があなたの求めに直接お応えになられたということです。」

大臣はとても驚きました。

「それでは、」ピリポは続けました。「あなたの主となられたイエス様について、最も大切な

16　エレミヤ29・13～14a

ことをお話ししましょう。今夜、天を仰ぐと美しい星空が広がっていることでしょう。その美しいものを創造された方が誰であるか、あなたはご存知ですか？　あなたはすでに、このお方を個人的に知っておられますよ。それは、十字架上で私たちを救ってくださったイエスです。すべてのものが一人のお方を示しているんです。救い主であり、十字架で死んでよみがえられた方、そのお方は実はこの世界の神であって、この地球も無数の星が広がる宇宙も造られたのです。」

「私の驚きはいつまで続くのでしょう。私の新たな救い主について、あなたが教えてくださるのはすごいことばかりです。でも、もう一つ質問があるんです。私がすべきことは、本当にただこの祈りを祈って、このお方を信じることだけですか？」

「ええ、そうです、そうです！」ピリポは答えました。「価値のあるものほど、単純なものです！でも、あなたのおっしゃるとおり、まだやらなければならないことが一つありました。イエス・キリストの名によってバプテスマ（洗礼）を受けることです。それによって、自分の古い罪の性質が過去のものになったことを証しするのです！　それがどんなに大切なことであるかイエスご自身が私たちに教えてくださいました。誰でも、信仰を持ってこのお方の元に

来たなら、次にすることはバプテスマ（洗礼）です。バプテスマを受けることによって、目に見える世界にも霊的な世界にも宣言するんです。「イエス様に従うことを私は決断しました。生きている間も死んだ後も、私は創造主である神のものです」と。バプテスマは第二の人生のスタートです。それはイエスと一緒に歩んでいなかった頃の古い生き方を止めることを意味します。[17] バプテスマは信仰を表すので、主イエスは『信じてバプテスマを受ける者は、救われます。』[18] とおっしゃいました。このように、洗礼は従順を表す行為でもあります。」

青空を水面いっぱいに映した湖の近くを通りかかったとき、大臣はどうしてもバプテスマを受けたくなりました。「見てください、水があります。私がバプテスマを受けるのに、何かさしつかえがあるでしょうか？」大臣は家来に馬車を止めるように命じました。大臣は馬車を飛び降りると、草の茂みに分け入りそのまま水に入ってしまいました。ピリポも、大臣の後を追いかけ湖水に入りました。水が澄んでいて魚が何匹も泳いでいるのが見えました。大臣の家来たちはハラハラしながら成り行きを見守っていました。いったい何が起きたとい

17　ローマ6・4
18　マルコ16・16

うので、大臣がその見知らぬ男によって水に沈められなければならないのか、家来たちには
さっぱりわかりませんでした。「あなたが心の底から信じるなら、続けて！」[19] とピリポが言
うと、大臣は答えました。「私はイエスが神の御子であると信じます！」
「あなたははっきりと主イエスに立ち返って信じる者となり、イエスにある信仰の告白の力
によってバプテスマにあずかることができる者とされました。今、天の父なる神、救い主御
子イエス、真理へ導く聖霊の御名によって、バプテスマを授けます。水に浸かることは救
い主とともに死んだことを表します。『キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たち
はみな、その死にあずかるバプテスマを受けたのではありませんか。』[20] 水から上がることは
あなたのよみがえりを表します。『もしイエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、
あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリスト・イエスを死者の中からよみがえらせた
方は、あなたがたのうちに住んでおられる御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだをも

19　使徒8・37
20　ローマ6・3

生かしてくださるのです。』」[21]

大臣が水から上がると、自分が生まれ変わったように感じられました。あたかも、湖の底に今までの人生をすっぽり置いてきたかのようでした。大臣は経験したことのない喜びで満ちあふれていました。それまでの大臣といえば、真面目でどちらかといえば陰鬱で、感情を表に現さない人だったので、旅の同行者は皆、自分の目の前で喜び笑っている人が同一人物とは到底信じられませんでした。

「いろんなことがあったが、とにかくこのお方に出会えたのだから、こんな感謝なことはありません。ピリポ、あなたは私の目を開いてくれた！ 私はあきらめて帰るところでした。こんなさびれた湖畔で、ようやく私は、イエスにあって神を見出すことができました。今、はっきりわかりました。神は、そこに行かなければお会いできないような、どこかに鎮座された小さなお方ではないと。神は、私たちが探し求めればどこででも見出すことのできるお方です。どこでもとは言いましたが、ただイエス様を通してのみ、ということなのですね。ああ、私の心は、喜びではちきれそうです！ 今回が、私の

21 ローマ8・11

人生の中で一番重要な旅となりました。なんと
いっても祖国の人々に最高の知らせを持ち帰る
ことができるのですから。」
　大臣がまだ話してる最中に、ピリポは突然大
臣の前からいなくなりました。
22 もはや大臣は何
が起きても驚かなくなりました。大臣は帰路に
つき、途中アシュドデでピリポに再会しました。
そこでピリポは力強く福音を宣べ伝えていまし
た。

帰路

　喜びに満たされ、大臣と彼のキャラバンは、一路エチオピアに向けて砂漠を進んで行きました。

22 使徒８・39

追記・あとがき

ヴェルナー・ギット

ヴェルナー・ギット　ホームページ　http://wernergitt.de

講演会の予定、ダウンロードできるエッセイや著作、印刷可能なトラクト（「天国へはどうやって行けるの？」、「創造主は誰？」、「一方通行の旅」、「ダーウィンが知らないこと」他多数）、60カ国語に訳されています。

報われた長旅 — エチオピアの財務大臣の物語 —

（聖書：使徒の働き第８章の記事による）

オリジナル版：No Journey Too Far
著者：Jasmin Yildiz
編集、追記とあとがき：Werner Gitt
翻訳：Alice Angela Goodall
イラスト：Doris Daubertshäuser
日本語第２版　2017 年３月
制作　© 2017 ゴフェルトゥリー・プロダクション、バイブル＆クリエーション
ISBN：978-4-9904128-5-2

9784990412852
ISBN978-4-9904128-5-2
C0016 ¥250E
定価：本体250円＋税
1920016002500

福音を宣べ伝える経験を通してわかったことは、エチオピアの財務大臣の物語（宦官—使徒の働き8:26〜40）は、聖書の中でも最も印象深い箇所の一つだということです。ここには神（天地万物の創造主）のことを何も知らずに神を探しまわる男が出てきます。永遠のいのちを見出すためなら、どんな長旅もいとわず、努力も惜しみません。何がこの大臣を、すべてを賭してまでまことの神を探し出すという固い決意に突き動かしたのでしょうか？

ジャスミン・イルディスさんは、聖書に基づきながらも自由な発想で物語を書き、読者を最後まで飽きさせないものにしてくださいました。特に聖書を読み始めたばかりの人にとっては、福音を理解するのに役立つはずです。救いを求めている読者は、ピリポと大臣が交わす会話から、救いを受け取るわかりやすい方法に出会うでしょう。そして、きっと、永遠のいのちを自分自身のものとして受け入れ、天の御国に至るステップを歩み始めるに違いありません。

ヴェルナー・ギット 工学博士

ゴフェルトゥリー・プロダクション
GOPHER TREE PRODUCTIONS
http://gophertree.jp